

3番（山口裕子君）〔登壇〕

おはようございます。珍しいことに女性が2人続いておりますが、先ほどから障がい者、障がい児の問題、いろいろ上がっております。私も長男、障がいを持つ子を育てながら障がい者の活動、いろいろな活動をしながら、今ここに立っております。先ほど上野議員もおっしゃいましたが、ピアニスト辻井さんの朗報は本当に私たちを元気にさせてもらうものであります。それを受けて、本当に一人一人が、皆さんすべての人に与えられた役割というものがあると思います。ここで私もその役割を全うして、できることを一生懸命に一人一人がやっていくものだと思っております。そういうことで、きょうも、いつもいつも一般質問は緊張して半分も言えなかったなという反省ばかりに終わるんですが、また、落ちついてしっかりと質問をしていきたいと思っております。

きょうは農業問題について、環境問題について、あと文化教育についてということの3点でお願いしたいと思っております。

最初にですが、農業問題について、本当に今いろいろ経済状況悪くなる中、農業が大切だとか、農業にいろんな声がかかっていたりしております。しかし、今まで農業がどうであったかということですよ。私のうちも兼業農家でやっておりましたが、私は全然農家ということを知らずにサラリーマン家族で育ってきているんですが、周りの方は、農業はするもんじゃなか、農業は食べていけない、農業はだいもせん、できるもんかというような声ばかり聞いておりました。しかし、今すべてが行き詰まった状態に来たときに何かしら農業に目が向けられております。そういうのも踏まえてか、市長はレモングラスのブランド化ということ。それは、農業者の方がなかなか経済的に本当に豊かにならないということと田んぼの有効利用、畑の有効利用ということ、あとはイノシシの害とかの問題などから、これがいい策じゃないかという形で、ひとつレモングラスという形でブランド化されて始めておられますが、このレモングラスを初め、今イノシシの肉になっておりますが、このブランド化を進めていく中で見えてきたものとか、これからどんなふう展開になっていくのかとか、そういうお話を聞かせていただきたいと思っております。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

私に対する批判の一つといたしまして、市長さんはレモングラスばかいしよおという話が私のところにも入ります。話せばわかるなと思っているのは、いやいや、そがんじゃないかですよと。今まで武雄にはそういう世の中の人からそんなに正直言って注目を集めとらんやったわけですね。僕も東京におったときに「武雄」と言ったら「それはカンボジアですか」と言われたぐらいですよ。だけれども、今どういうことが起きているかということ、これは小池議員の前の質問でもありましたけれども、武雄に非常に注目がやっぱり集まっています。き

のう、森山直太郎さんのコンサートに行ったときに「武雄に来てがばいうれしか」と言いんさったわけですね、森山直太郎さんが1,300人の満員の中ですよ、本当にやっぱりうれしく思いましたね。ですので、私としては、まずレモングラスはきっかけです、これは、基幹産業と言いましたけれども、きっかけとしてレモングラスに注目を集めることによって、やればできるんだということ。何もレモングラスがすべてじゃありません。レモングラスでさえできたんだと。じゃあ自分たちがつくる、本当に精魂を込めてつくる、例えば、チンゲンサイであるとか大豆であるとか、そういったこともそのレモングラスが培ったブランド、そして、もう販路も結構あります。そういったのに一緒にのせていこうということであります。前々の議会でもレモングラスと言えばね、どこかでつくいよって批判というか、議会でも質問を取り上げていただきました。これもいい宣伝効果になりました。そういった意味で、私といたしましては、さらにこれをきちんと宣伝をするということを踏まえて、この波及効果をさまざまな農産品に移行していきたいと思います。

京野菜がそがんやったとですね。最初、京野菜は賀茂ナス、ばんと売ったわけですね。ほかのところでは売らなすの3倍ぐらいで売ったわけですね。そいぎ、賀茂ナスだけじゃ足りんことになったけんが京ニンジンであるとかミブナであるとか、さらに追加していったわけですね。それをいい循環が今武雄にできているということでもあります。

終わりにしますけれども、レモングラスはことしの7月、また、新宿の伊勢丹店で、一番人が集まるところであります。新宿の伊勢丹店からぜひ出してくれということでレモングラスのフェアをしていくと。その際に当たって我々が気をつけなきゃいけないのは、何もレモングラスだけじゃなくてほかにもこんなありますよということをあわせて宣伝をしていきたいと思っておりますので、ぜひ議会の皆様方にも、いろんな思いはあられると思っておりますけれども、力強い御支援を賜われればありがたいと思っております。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

はい、ありがとうございます。本当に今まで農業ができなかったというところでだれもやれないというような問題点が多かったんですが、今、やっぱり農業に皆さんチャンスがあるというか、ピンチにチャンスというか、そういう見方もふえてきているんな展開の仕方があると思うんですね。けども、市長がおっしゃるように、そのブランド化にしていくまではやはりいろいろな大変なことがあると思うんです。

やはり、こつこつと続けていく。農業というのは皆さん、本当、厳しい苦しいところをこつこつと続けてきて、今まで本当に大事な仕事としてやってきてあるわけであって、そのこつこつ続けていってブランド化にしていくということが大切だと思います。また、レモングラスが1つ歩き始めたら、また、次のブランド化という形になっていくと思います。

市長にお尋ねしたいんです。

とても私は武雄市も、そういう意味でたくさんの行政視察とか、いろんなところから視察に来られていますが、本当に参考にしてほしいなという、ここは村なんですよね。だけど、6月4日の農業新聞の1面に、カリスマの戦略という形で長野県川上村の藤原村長さんの話が載っていました。ここは高原レタスでブランド化をして、私はこの記事を読んだときに何かどきどきしたというか、本当に何か抑えられない気持ちがありました。それはいろんな反対を押し切って、この村は農を基本とするという信念を貫いて、6期21年歩んでこられたわけですね。リゾート法とか工業誘致とかいろんな話が来たときに、やはりこの村は農を基本としてやっていくという形でいろんな施策をされて、21年間の結果として、今、後継者がどんどん育っているわけですね。後継者の平均年齢が28歳というわけです。5,000人の村ですね、そこは。28歳です。今、農業をやっている人は50%、60%が65歳以上の就労者なんですよね。と考えると後継者の平均年齢が28歳、それで、また話題を呼んでいるのは平均年収が2,500万円以上なんです。本当にこれを読んだだけでびっくりしたんですが、若い人がよその県からお嫁に来ていて、合計特殊出生率が1.83人で全国トップなんです。本当に若い人が結婚して子どもたちも生まれているということですよ。でも、この村長さんの努力というか、やっぱりこれは信念を貫いたという、いろんなところから視察に来られるときに、信念を持って通すことが大事だということを皆さんに言うてお話しされているというわけですね。

ぜひとも、私は市長はこれを参考にして、やはりレモングラスを手がけられるときにも、本当に有機農とか無農薬でやっておられるタイの大賀さんのところに研修に行かれたりしていますが、ここは世界で一番の産地のアメリカに毎年若者を研修に送り出しているんですね。その交流をされていて合同でレタスのブランドというか、そういう開発もされているわけです。ぜひとも私は、村長さんではあられませんが、こういう信念を持って続けていくという点で提案をしたいんですが、市長の御意見をお聞かせください。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

私の信念は、農業関係でいうと、食える農業にするということでありまして。先ほど、川上村長さんのお話が出ましたけれども、これを私もちょっとテレビでしかまだ見ていませんけれども、もう1つ私が感銘を受けたのは、農業は1次農業ではないと、6次農業であるということをおっしゃる東大の先生がいらっしゃいます。これはどういうことかということ、1次産業、2次産業、3次産業掛け合わせると、掛けるとね……

〔3番「掛けですか」〕

6になると……

〔3番「足して」〕

足してかな。

〔3番「はい、足して」〕

あら、足して。

〔3番「はい」〕

はい。このごろ私もすぐ修正します。足してですね。ということで、足して6次になると。これはちょっと私が理解をしたのは、今まで農業というのは本当、川上のところだけしていくんだけど、そこを6次産業と言っている人たちは、やっぱり、例えば売れない牛肉を農村レストランに出していくと。そこで雇用もちゃんとするというので、熊本県の阿蘇の近くの話が二月ぐらい前の「報道ステーション」に出ていました。私が思うに、食える農業にするためには、そこまでいくには少なくとも、やっぱり10年か20年ぐらいかかるなということのを思いましたので、私はその間もぜひ市長をやっていきたいというふうに思っております。

その上で私が申し上げたいのは、やっぱり夢なんです。夢というのは食べることができると。要するに、所得をきちんと上げることができるということからすると今回の病院、これが最大の私は起爆剤になるというふうに思っております。今度、新聞等では出ましたけれども、東部の地区に新しい病院ができる。そうすると、そこに雇用が生まれ、またそこにいるんな人たちが集まってこられます。そういったところに恐らく人が集まるということは食べなきゃいけないと。食べることを目的にして来ると。要するに、武雄に来れば体を治して健康なものを食べられるということになると思いますので、ぜひその近くに農村レストランであるとか、あるいはJAさんの何か施設ができて、そういうふうにいるんな高く農産品を買っていただいて、そういう付加価値をつけて料理で出していくと、健康食として出していくという流れに必ず武雄はなるというふうに思っています。

これを見越しているのが農林水産省です。私、以前東京に呼ばれたときに、いみじくも農水省の担当の人がそのようにおっしゃいました。今までは医療というのはともすれば命、健康の問題だったんだけど、市長、ちょっと考え方を広げてはどうかということをおっしゃいましたので、これは国の補助金もきつとつくというふうに思っておりますので、病院で交付金がついたのと同じに、また国からも補助金を引っ張ってきて、それを市民の皆さんたち、農業生産者のためになるように、地域の所得向上につながるようにしていく手だてを考えていきたいというふうに思っております。

終わりにしますけれども、本当に全国が今注目をしています、この動きに対して。ですので、病院関係でもいろいろお考えがあろうかと思っておりますけれども、ぜひ地域の振興、これを私は絶対に武雄は必要だと思っておりますので、そういった意味から、ぜひ力強い御支援を賜ればありがたいと思っております。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

本当にですね、今、価値観とか意識も大きく変わろうとしているときであります、例にとります村長さんの考えが、きちんと貫いたところの信念をやはりこの武雄市にも生かさせていけるんじゃないかと思うんですが、直接的に支援とか補助も大変必要になってくると思うんですが、ここの村は3つの「こう」といまして、やはり農業を営むには少子・高齢化社会の中、どうしてもお年寄りとか子どもの送り迎え、交通の便というところで、ここは本当、それに農業の労働時間をとるということで村営のバスの運営を始められました。これも取りかかって1年で黒字になっているわけですね。農業だけじゃなくても必要とされています、今はそういう交通というところで。あともう1つの「こう」というところが、高齢化対策で元気に過ごしてもらおうというところで、ここは本当に医療費が長野県で一番の少額なんです。医療費も少額になっているんです。それには村営の鍼灸施術、腰を痛めたりとか、そういう労働に対しての治療として村営の鍼灸、あとリハビリとかプールとかが設置をされた介護施設が村営でされています。あともう1つの「こう」というのが交流ということで、海外視察、どんどん若い人を育てるという形で交流をされているというところです。この3つをされているわけですね。だから、そういうところも武雄市も参考にして、これからはきちっとした形になっていくんじゃないかと思うんですが、私はここから次のブランドというところでお話をしたいんです。

前回、市長も質問の中でたびたび出てきておりましたが、今、大変、米の普及というか、消費が悪く、幾ら農業農業と言っても米の消費が伸びません。そこで、今の米の粉、米粉ですね。米をパウダーにしてパンを消費するというか、パン屋さんとか、学校の給食がパンにかわったりとか、そういうパウダーのほうに動いてきております。本当にこの問題を上げた途端に、熊本県が9月から学校給食を県全体週1回米粉パンにするそうです。そういう話になってきておりますが、ぜひともですね、この地域活性資金とかそういう形を、米をパウダーにする事業というかな、そういう展開になっていかないかなというふうに私は提案したいんですが、武雄市も米飯給食が週4回になりました。1回がパンになっております。やはり私もパンは好きです。今どんなところに行ってもパンの焼きたての香りがしてくると、どこもパンというのは行列ができていますね。だから、ぜひともこの米の消費にも向けて、あと経済も上げていくために、この米の消費のところからパウダー事業という形で市長も前回言っておられましたが、何か事業展開になっていくんじゃないかというふうに思いますが、いかがお考えでしょうか。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

まず、私の考えはその米粉に一点集中せずに野菜ですよね。野菜のパウダー化が私は必要だというふうに思って議会で答弁をしたんですけども、普通、私が気合いを込めて答弁すると世の中、いい悪いは別にして盛り上がるんですが、パウダー化に関してはあんまり反応がなかったんですね。ですので、ちょっと需要がないところで、これをいきなりパウダー化すると言っても、かえって施設だけつくって物にならない危険性がやっぱりあると思うんですね。

レモングラスを言ったときというのは、すぐ新聞も取り上げましたけれども、すぐわあって、いい悪い何だろうということで盛り上がったんですけど、ちょっと実際、そのパウダーを使ってやってみたいというところをもう少しちょっと調査をきちんとやっぱりする必要があるんだろうなというふうに思っております。多分、これはＪＡの方々も同じ考えだというふうに思っておりますので、そういう需要が見込めた場合には我々としては、先ほどおっしゃったように、さまざまな補助金、交付金が今国のほうからおりてきていますので、そういうことを活用しながら進めていく必要があると思います。

大きな流れでいうと、私はパウダー化になるというふうに思っています。例えて言えば、野菜、生ではなかなか食べられないけれども、例えば、パウダーにして、それをケーキに入れることによって食べていただくとか、そういうふうに私はなるというふうに思っております。それとこれが介護、あるいは離乳食にもつながっていくというふうに思いますので、そういう需要をもう少し見ながら進めていきたいなというふうに思っております。

以上です。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

確かに私もそうだと思います。野菜とか、チンゲンサイもそうですが、捨てるところが多いので、やはり野菜もパウダー化すると、また先々、いろんなめに、グリーンのもんができたりとか、そういう販売につながっていくんじゃないかなというふうに思いましたが、今市長がおっしゃるように、需要というところを考えたら、やっぱり給食でパンを食べているわけですよね。だから、本当に熊本県が学校給食を米粉パンにするわけですね。630校の16万人、県が予算を立てたのは6,000万円です。9月から実施するということです。そうすると、やはりここでしっかり米粉にして米の消費がなされていくわけですね。それを考えると、一番つながっていくのが私は米のパウダー化かなというふうに考えたわけです。

確かに、私もそうは思っても、どんなふうな事業展開だろうかというふうにちょっと見えてこない部分もあります。今、ＪＡとかが取りかかっているのは全国で4カ所ぐらいですね、そのパウダーの機械を入れてやっているところが。普通の米粉にする製粉はだんごとかまん

じゅうはいいんですが、これはパンだから微粉というか、すごいきめの細かいパウダーにしないと焼けないわけですね。その機械になると1時間で1トンできるので、機械だけで7,000万円から8,000万円です。あと1時間で30キロできるやつで2,000万円から4,000万円とされています。これは少し、だれでもできるというか、1時間で10キロが260万円程度で今出ているというわけですね。だから、どういう事業体になるのかわかりませんが、やはり米消費とか、今後のパウダーにしてのブランド化というところでは検討する余地があるんじゃないかと思ってお聞きしておるんですが、もう一度答弁をお願いいたします。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

私は料理が大好きなんです。タイ料理の中でラープという野菜サラダの辛いサラダがあるんですけど、ひき肉に米粉を混ぜて一緒にいっているんですね。だから、我々ともすれば主食のほうにね、例えば、米粉であるとか、そのパウダーであるというのを向けがちなんです。パンもそうなんです。でも、タイとか、特にアジアになると副菜ですよ。副菜に結構、米粉とか米を使っていて、特にタイのお隣の　お隣じゃないですけど、マレーシアが一番売れているプリンも米のプリンなんです。米のプリン、物すごくやっぱりおいしいです。だから、そういうふうには主食的なよりも副菜のほうがバリエーションも広がりますし、デザートのようにね、米を使っていくということも我々はあわせて必要なんじゃないかなというふうに思っております。恐らく食改の皆さんたちは十分私よりも御存じだと思いますので、そういうのをあわせて研究をしていけば、よりさらに主食だけにするよりは広がっていくのではないかなというふうに思っております。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

やはり米粉が何で伸びたかというのは、2008年の調べで米粉を使う量が7倍に伸びているわけですね。というのは、やはり小麦の高騰ですよ。日本は小麦の自給率がたった14%だから、本当に小麦が、オーストラリアとか干ばつとかになると、すぐ値段が上がってしまうわけですね。だから、小麦が高くなったとき、高騰のことを考えてでも、このパウダー事業というのが私は今後見込まれるんじゃないかというふうに考えておりますので、ぜひとも検討していただきたいと思っております。

その事業が、最初言われたように、野菜とかヨモギとかそういうフリーズドライにしてパウダーにする。また、機械は全然違うと思うんですが、そういうパウダー化、それも一緒にいいんじゃないかというふうに私も考えておりますので、ぜひとも検討していただきたいと思っております。

それでは次に、農業問題の中の耕作放棄地と休耕田の活用についてお尋ねします。

やはり今後、農業者の高齢化と若手後継者の不足により、ますます耕作放棄地や休耕田がふえていくことが予想されておりますが、市としては、水田の有効活用の促進、またレモングラスなどもそういう1つだと思いますが、力を入れておられること、また対策などをお聞かせしていただきたいと思っております。

議長（杉原豊喜君）

前田営業部長

前田営業部長〔登壇〕

耕作放棄地、それから遊休地の活用でございますが、これについては、21年度から国のほうで、先ほど言いましたように、米政策の中で、先ほどの米粉になる稲ですか、その栽培、それから飼料用となる稲の作付、これについて国のほうから補助が出るということでなされております。武雄市におきましては、現在この耕作放棄地の対策としては中山間地域の直接払いの制度、あるいは農地・水・環境保全対策の事業、それともう1つは、ことしの7月から8月ぐらいに考えておりますが、県の協議会の指導を受けながら耕作放棄地対策協議会、これは仮称ですが、これについて立ち上げを今検討している段階でございます。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

そうですね、これも米粉利用であればオーケー、飼料用だったらオーケーというふうな形になってきていますよね。ことしからということだから、どんなふうに関係していくのは今からだと思います。それも本当にいいことだと思うんですね。

もう1つ私は提案したいことがあります。最近の新聞にも、皆さんがそう思っているからだと思いますが、耕作放棄地とか休耕田の利用で菜種です。景観もよくなるし、この菜種油からバイオディーゼルというバイオマス事業、そういう展開につないでいくことができないかというふうに思っているんです。やはり今、田んぼを耕していてもディーゼルで油が要るわけです。いろんな事業所もそれで動かせるようにうまくいけばいいんですが、どこも今現在やっているところは運営が厳しいとか、うまくいかないとか、NPOでやったりいろんな形態でやられておりますが、やはりこれが武雄市が主力として、こういう後押しというか、事業展開になっていかないかなというふうに思っているんですが、1つの例は、やはりNPOとかと一緒に菜種をまいて刈り取って油をとって、廃油を回収したのと同時にバイオディーゼルに使うという展開がもう既にされております。これは鹿島のほうですね。

そう思っていたら、二、三日前だったと思っておりますが、国、実証モデル地区、伊万里市を初認定、バイオ燃料普及拡大へということで、これは運輸業界が手がけるようになっていきます。



が、こういう利用、水田の利用というか活用になっていかないかなというふうに私は思うんですが、市長のお考えをお尋ねいたします。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

レモングラスは武雄市がおよそ実証実験という形でいって、うまくいきつつあります。今全国からそういった意味で御視察もいただき、注目を集めていると。菜種については、ちょっと伊万里市さんの動向を見ていきたいというふうに思っております。

私としては、伊万里市さんの国の認定の特区みたいなものですよね。これがうまくいくと判断した場合に、これやっぱり量が必要ですので、そういったときに我々としては、近隣の市町村、あるいは県、これは知事とも相談をいたしますけれども、県全体で進めていく必要があるだろうと思います。なぜ高いかという、量がやっぱり足りないからだというふうに思っておりますので、これは武雄市単体の問題であるよりは、例えば、杵藤広域圏であるとか、伊万里と一緒に組んでやるとか、そういうふうに面を広げながらやっていく必要があるだろうというふうに思っております。ひょっとすればレモングラス課を廃止して菜種課ができるかもしれません。

以上です。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

そうですね、何もかもというわけにはいきませんが、やはりエネルギーという部分でも、できるだけ自給自足ということを考えたほうが私はいんじゃないかと思えます。ぜひとも、地域活性資金とかそういうのが今おりてきているのならば、そういう活用方法があるんじゃないかというふうに思っておりますが、本当に伊万里市とか鹿島市の事例とか、そういうところの展開、今までNPOとか細々としているところは自分ところだけの保育園バスとか、自分ところだけの環境センターの車という形だったんですが、それをうまく運営していけば大きくエネルギーの自給自足という形になっていくんじゃないかというふうに思っておりますので、いま一度検討していただきたいなというふうに思えます。

それともう1つ、耕作放棄地と休耕田の活用というところで、総務で研修に行ったんですが、京都の亀岡市の市民農園の展開があったんですね。本当にどこもこれからというところもあったり、いろいろ検討の余地あったりなんですけど、ここは農家と直接に取り交わして農地を貸すわけですね。農業を本当にやりたい人に農地を貸して、そして、指導まで農家の人があるという形で市民農園の特区という、そういう形が生まれておりました。やはり農業が今大事とか農業はいいねという形で、全然やったことのない人とか、これからやりたいと

いう人ができる形となれば、こういう市民農園、前回もちょっと言いましたが、市民農園をきちんとした形で募集すれば、こういう取り交わしができていくんじゃないかなというふうに思います。農事組合の関係とかいろんなものが出てくるでしょうが、市民農園のところの充実というか、そういうところでもちょっとお聞きしたいと思いますが、お願いします。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

お答えいたします。

今、武雄の市民農園の状況は、これは特定農地貸付法に基づきますけれども、約3,000平米あります。利用料金が1区画、15平米ですけれども、4,200円であります。利用区画が74区画でありますので、90区画が全部で、そのうちの74区画でありますので82%の利用であります。まず、我々が考えなきゃいけないのは、今ある既存の市民農園をまず埋めるとのことだというふうに思っております。

これにも加えて私、山口裕子議員がおっしゃったことでなるほどと思ったのは、以前ちょっとお話を聞いたときに耕作放棄地が観光農園みたいにならないかと、市民農園というよりはむしろ花をね、花卉を植えて観光農園みたいにならないかということでは、非常に私は感銘を受けました。そういった意味で、直接そこで農作物を体験としてとるとするのは今の市民農園、交通の便のいい市民農園で、むしろ景観とかいろいろ観光とセットをしてやっていくのはどちらかという花卉、花のほうがちょっと素人ながら言うのも恐縮ですが、そっちのほうがいいのではないかなというふうに思いました。

終わりにしますけれども、また、観光客が物すごく今ふえています。がばいばあちゃんの口ケ、そして、どうももう1個口ケがありそうですけれども、ふえていきます。そういった意味で、バスとか歩いて回られる方々が、ああ武雄に来てよかったというふうに、耕作放棄地が、逆にマイナスの資産がイノシシではないですけど、プラスの資産になっていくようにうまくプロデュースをしていく必要があるだろうというふうに認識をしております。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

そうですね、一番私も大事なところ、農業をする人がいて環境が守られているというのが大きいですね。本当に農業をだれもしなくなると、もう道、いろんな田んぼ、畑がどんどん荒れていくわけですね。だから、そのためにも放棄地とかそういうところをつくらないようにしなければいけないというふうに思っております。

また、本当、今までの考えから離れて家が農業であるとか、農業者の息子でないと後継者にならないとかそういうのじゃなくて、今若い人で本当に何もしたことないんだけどやって

みたいとか、そういう人たちが取っかかりになるような、市民農園みたいな発展になることを私は願っております。そういうことで、またいろいろと検討していくことばかりであります。よろしくお願いします。

次、2番目、環境問題について質問いたします。

循環型社会計画ですね、何回も私は質問しているところでありますが、武雄市は本年度、ごみゼロ特区制度ということで、ごみの排出量削減と分別徹底による資源化率を向上させようというのを目的にした事業をスタートしました。これに関して市長の思いと、これからどんなふうなのを望むのかをお聞きしたいと思います。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

ごみゼロ特区は山口裕子議員のさきの議会の御質問を踏まえて制度化したものでありますので、きっかけをつくっていただいたことに、この場をかりてお礼を申し上げたいと思っています。

その上で私がうれしかったのが、佐賀新聞、6月11日、こんなに大きくなかったと思えますけど、これちょっと拡大しとおとかな。（発言する者あり）等身大です。（資料を示す）非常に大きく扱って、これは若木の附防の緒方さんを中心にモデル団体として若木の附防区、山内、北方町の地区婦人会を中心にチャレンジをされているというのがこう出て、「これだ」とやっぱり思ったんですね。行政がもう手とり足とりではなくて、一応そういう制度をつかった上で市民、住民の皆さんたちが家庭からしていくということに非常にこれは大きな起爆剤になるというふうに思っています。

先日、用事があって中国地方に行ったときに病院の話もいっぱい出てきましたけれども、実はごみゼロ特区の話がもう出てきました。非常にこれはいい試みではないかということで、ぜひ参考にしたいという自治体も出ています。何よりも地域の皆さん、固まりでいうと、その婦人会の皆さんたちが一生懸命やっておられるということと、もう1つが家庭からということ。これは繰り返しになりますけれども、それで意識づけをしていって、これはうちの今元気のある環境課が言っておりますけれども、「活動の中でひとり暮らしのお年寄りのごみ出しをサポートするなど、住民同士が協力する場面も出てくると思う。環境問題への関心が高まるとともに、地域コミュニティの強化につながれば」ということで、環境課のコメントも載っておりますので、ぜひこの後押しをまたしていきたいというふうに思っております。そういった意味で、これも力強く応援をしていきたいというふうに思っております。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

特区を受けた地区から始まるわけではありますが、その地区がごみに関心を持ってごみ減量に力を入れていって、そこから周りに広がっていくという、時間がかかるものだと思います。あと同時に、この特区を指定地区とか特区の期間だけ1年とか、そういうので終わらないようにぜひともしていかねばならないと思っております。

そのときに一番気になるのは、市で言うならば市がイベントとかお祭りをしますね、そのときが一番ごみに関しての打ち出しのチャンスなわけですね。そのときにやはり何か経済効果ばかり言っていると、すべてが使い捨てになっていたりとか、全然意識がない、ごみばかりを生み出してしまうという状況になるんですね。イベントとかお祭りをすると、ごみだけが残ってしまうという実情があるわけです。だから、ぜひとも指定地区だけではなくて、そういうときに行政からの投げかけ、うちは今こういう動きをしています。ごみダイエット作戦とか、仮称だったですが、そういう名前でも打ち出しをしてきちんとごみは持って帰ってもらうとか分別をそこでするとか、そういう打ち出しをしていただきたいなというふうに思っております。

指定を受けた地区は、うちの地区もそうですが本当に意識が高まります。毎週ですね、ごみ袋、今週は何袋とか、何キロとはかれると何キロがいいんですが、そういうふうにただするだけで意識高まって、なるだけごみを持ち帰らないようにしようとか、分別をきちんとしようとかという形になってくると思うんです。だから、ぜひともそういう動きを行政も大きく打ち出してほしいというふうに私は思っております。

だから、イベントがごみ減量を目的としたフリーマーケットとかお祭りとか、そういうのがあってもいいと思うんですが、ぜひともそういう形で行政もしっかり動いていただきたいなというふうに思っておりますが、いかがでしょうか。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

ごみゼロ特区が予想以上にうまくいきそうですので、2匹目のドジョウじゃありませんけれども、今度はイベントのごみゼロ特区をつくりたいというふうに思っています。

これはどういうことかという、やはりごみの山ということになると、これはいろんな経済でも不経済効果と、その環境の非効果が出てきますので、例えば、使い捨てのコップ、皿、割りばしなどではなくて、例えとしてマイコップを持参すればね、10円安くなりますということをして、そういうイベントに協賛してもらえるところはね、我々もそのマークか何かをつくってこういう協賛をしていますと。非常にやはりそういったことに社会的参加をすること、それをマークとか認定とかあると、さらにそれがやっぱり今広まる、非常にいい世の中になってきたと思うんですね。

だから、そういった意味でごみゼロのイベント特区をつくって、一番最初に、ことしの物

産展、12月の頭になると思いますけれども、そこでまず開始していきたいというふうに思っております。そこで試行的にやることによって、さまざまなまたイベントに広げていきたいというふうに思っております。これをおしゃれにやっていくこと、そのプロデュースをするのが環境課であり、我々の仕事かなというふうに思っておりますので、また、制度設計が終わりましたら、議会の皆さん、市民の皆さんたちにきちんと御報告をしたいというふうに思っております。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

本当にそうですね、ぎすぎすしないで楽しく、おしゃれにどんどん環境問題、ごみとなっているものが資源化されていい形になっていくように私たちは活動しなければいけないというふうに思っています。そのときに本当に行政と企業とかお店、それと地域住民が連携をとってなし遂げていかなければならないというふうに思っております。

1つ、私は一番最初に、がばいばあちゃんのロケ誘致のときに一番うれしかったのは、このもったいない精神ですね。ああ、本当に環境もセットにして打ち出せるというところで、しっかり武雄はこういうまちづくりをしているんだという、もったいない精神のところをしっかりと出していただいたなというふうに私は思っております。

あと、市長が言われるように、本当に今までは経済発展ばかり言っていると、環境を持ってくるとなかなかそこがうまくいかないという状況でしたが、今環境あって経済という形をうまく出しているところがあります。それも総務のほうで研修に行ってきたんですが、三重県の農事組合法人の伊賀の里モクモク手づくりファームという農業を観光にしているところなんですね。そこでは本当に公園に入るときに、中では一切自動販売機はありません。その飲み物を飲むわけです。そのときも必ずそこで売っているんですね。それはまた経済効果になります、マイバッグでもマイコップでも売っているんですが、それを使えばジュースが10円とか20円とか安くなるわけですね。入場券とかも一切ありません。全部循環できるように木製のチップでつくられていて、それを何回も使うわけですね。ごみが出ないというのを打ち出しているんですね。すべてを循環化していった資源にするという農業公園というか、そういう形を出しています。でも、そこは本当に年44億円の収益のある農業法人なんですね。だから、本当に環境を打ち出して、来るお客さんからいろいろ要望があるそうなんです。自動販売機を置いてほしいとか、宿泊施設もある公園ですので、自動販売機がやっぱりあったほうがいいのか、そういう要望もあるそうなんです。でも、しっかりお客さん、消費者を環境教育、そして食育教育をするという形になって経済をしっかり生み出しているところなんですね。そのスタンスというか、その考えがきちりできていることに私もびっくりしたんですが、これで環境を言っていたら経済は伸びないとかじゃないと思うんですね。だから、

ぜひともこういう考えを取り組んで武雄市もやっていただきたいなというふうに思います。

あと、もう1つの事例が佐賀新聞に載っていたので、皆さん御存じだと思いますが、試験的にやってみるということで、京都市がエココンビニを3カ月間試してみるということだったんですが、それもお弁当とかも一切おはしをつけない。弁当などもレジ袋や割りばしをつけずに販売して、マイバッグなどの活用を呼びかけるんですね。まず、自動販売機ではマイコップを持ってきたら清涼飲料水やコーヒーとかが1杯250ミリリットルが50円で買えるという形態になるんですね。それが、エココンビニが市役所の中に登場するわけです。これは試験的に今から、23日から3カ月間ですから、まだ始まっていないですよ。オープンするということです。

だから、本当にこういう打ち出しがあちこちにどんどん出てきているわけです。武雄市も、本当にこれでいいんだろうかということのような話ですが、やはりここを環境と一緒にやっていく、環境問題を解決していくにはこういう取り組みがあちこちであっているということです。ぜひとも市長はそういう先進的な形で取り組んでいただきたいというふうに思っておりますが、いかがでしょうか。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

確かに議員がおっしゃるように、そういった意味での意識づけとか動機づけというのは行政、なかんずく私の役割というのは非常に大きいと思うんですね。だから、市長がこういうふうにしていくのがやっぱりいいんだと。これは市民病院の民間移譲のときでもつくづく思ったんですけどね、やはりある意味シンボルとしての役割を期待されています。そういった意味で私がやっぱり進むべき道、行政の長としてとるべき道というのは議員がおっしゃったとおりだというふうに思っておりますので、まずできることからやっっていこうと思っております。

私は山口議員からお話があって、私生活の部分は大分改善をしました。別に報告しなくてもいいと思いますけど。今度は、例えば楼門朝市であるとか、先ほど話をしました物産展であるとか、市とかかわり合いがあるところ、あるいは私とかかわり合いがあるところから、だんだんに広げていって、気がついてみれば、ああこれがいいんだと。これでいいんじゃないかと、これがいいんだというふうに持っていきようなのになに力も果たしていきたくて思っております。

私も市長に着任をして、途中ちょっと空白がありましたけれども、3年間、いろんな諸問題、諸課題を一つ一つ丁寧にクリアしていくというのが私の3年間の仕事だったというふうに思っております。おかげさまでそのほとんどすべて一定のめどがもうつきましたので、今度は市民の皆さんと一緒にこういう社会つくっていいよというところまでやっとなってきたとい

うふうに思っておりますので、ぜひ議員もさまざまなお考えがあつていいと思います。そういった意味で、武雄をこういうふうにしていこうという議員さんたちにもやっぱり物すごく期待が集まっているというふうに思っておりますので、そういった意味で一緒にこういう世の中をつくっていこうと、エコ社会をつくっていこうという運動をぜひ広げていきたいというふうに思っております。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

本当にすべてをこつこつと積み重ねていかなければいけないと思います。指定を受けた私たちの地区でも、今は30人ぐらいであります。EM処理ポットを購入して、ぼかし肥で生ごみ、捨てれば生ごみが大体ごみの30%を占めていますよね。それを資源化して、いい土づくりをして、今山地区を本当に土を元気にして花いっぱいにしていこう、そして自給自足の野菜、元気な野菜をみんなでつくろう、その姿を子どもたちに伝えていく形からやっていこうということで、本当にみんながわくわくというか元気に、わあ、どうなっていくだろうかという形で取りかからせていただいております。これが次々周りの地区とかに広がって行って、この環境に対しての意識が強まっていけばいいなというふうに思っております。ありがとうございます。

そしたら次に、最後になりました。文化教育についてという題でちょっとあれなんです、空き庁舎です。もう何回となく言っているんですが、山内支所の空き庁舎が、一番住民が早く自分たちの居場所として使えたらいいのになというふうな意見をたくさん寄せられます。私が思うには、今回も教育長の教育に関する報告というところで、本当に一番私がいつも思っているのが、あらゆる世代の市民が多様な知識や教養を気軽に求められるような生涯学習の環境づくりというところですね。旧町では本当に図書館がなく、女性ネットワークで、グループで何とか図書館、図書らしいものが読める山内町になるように運動をしてきました。細々でしたが「どようぶんこ」というのをやっと組織して活動してきている中、このたび本当に活動している皆さんとか、女性ネットワークの皆さんとか、そういうおかげで、その活動の功績がたたえられて文部科学大臣賞をいただくことになりました。

本当に子どもたちにすすすく育てほしい、このまちが大好きで育てほしいなという思いの、お母さんたちの仲間なんですね。そういう人たちの活動を思うと本当に何で山内町に、ささやかでもいいから本を読めるところであつたらいいなという意見が寄せられているのになかなか実現しないのに歯がゆい思いをするわけです。今、本当に庁舎の2階、上がってすぐのところのオープン施設と隣の会議室を使えば、山内町を愛する人がたくさん本も贈られています。プチ文庫とかあれも全然活用されないまま公民館の廊下にあります。そんな本とエポカルの巡回図書でもいいです。そういうところの小さな図書館でもいいんです。空き庁

舎をどうしようかどうしようかと言っている間に3年たちましたが、こういうお母さんたちの地道な活動のつながりとその居場所、あと子どもたち、中学生、高校生もどこも本を広げるところありません。ぜひともあの空き庁舎にそういう活動の場所をお願いしたいと思っているんですが、市長お考えをお聞かせください。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

御指摘ありがとうございます。山内支所のあいているスペースに関しては、今、我々職員の執務時間内において市民団体の方の会議等に御利用をいただいております。一応、事務方からは支所内の図書施設の設置については、場所の問題、管理の問題、空調の問題があると思われまして、これはやるなという答弁書だと思いますけれども、私はちょっと違う考え方があって、あくまでもその庁舎の管理をするのが公務員でなければいけないといったことは、ちょっとそれは違うのではないかと。あくまでも庁舎というのは市民の皆さんたちの、町民の皆さんたちのものでありますので、この施設管理がだめだというネックに、ハードルになっているということであればね、それを改善する方向でしていきたいと思っております。

ちょっと前に、山内、あるいは北方の支所をそういう目で見たとときに、まだまだ十分に活用されていません。そういった意味で、私は先ほど事務方が言うのももっともだと思います。その施設管理という意味でいうと、これも市民の財産でありますので、これをクリアができる、契約としてクリアができるということであれば、ぜひ私はミニ図書館としてね、皆さんたちがここはいいということの部分というのは使っていただきたいなというふうに思っておりますので、そういった意味での契約の問題であるとか、民間の方々に、あるいはNPOの方々にその施設管理をきちんとしていくことができるかどうかも含めて私はこれはやっていきたいというふうに思っております。

いずれにいたしましても、もう1つ、場所の問題でなくて、読み聞かせの永尾さんが私を表敬にお見えになりましたので、話したときに本がやっぱり欲しいと、使える本が欲しいということでありましたので、これは予算を増額します。やはり本があってこそその教育、そして、本があっての子育てだというふうに思っておりますので、これは永尾さんの思いというのは重く受けとめて、今後そういった本、読み聞かせが、例えば、子どもたちの教育であるとか、我々の教育であるとかになるというのは議員と認識は同じでありますので、そういうハードとソフトの面から推進をしていきたいというふうに思っております。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕



活動している団体も、子どもたちがここで本当に健やかに育てほしいとともに、やっぱり高齢者というかお年寄りの人もそうなんです。よく言われるのがグラウンドゴルフとかゲートボールするのが好きな人ばかりじゃなくて、本を読みたかったり図書のある部屋に行きたかったりするんだけど、山内は行くところのなかもんねという声が寄せられるわけですね。だから、やっぱり生涯通じてですね。今、本当に人と人が触れ合う場所というかな、そういうところが必要だと思うんです。

「どうぶんこ」の役割が何でいいかというと、ちょうど畳の部屋ですね、あと乳幼児のお母さんたち、お嫁によそから来た人とか、このまちを余り知らない人、お友達もいない人が子どもを連れてそこで週1回集える、本と一緒に開いて集えたりする場、そういうところで充実してきたと思うんです。だから、やはり生涯通じて人と触れ合うところ、そういう場としてでもそういう施設が必要になってくると思います。

私は北方の公民館で障がい者の団体の総会をしたときに、託児も用意していたんですが、北方にある図書館、そこもそう小さくなくて立派ではないですよ。だけど、そこで障がい者の子が本を広げて、ずうっとそこに1時間、2時間楽しく過ごせたわけですよ。だれでもが、障がい者の子だけでもないですが行き場所がないですよ、山内だって障がい者の子が自分で何か読みたいとか、何か自分で出かけていって遊べるじゃないけど、時間を過ごせる場所というのが、やはりそういう場所になってくると思うんですね。よその図書館の形態とかを見ると、今ほとんど図書館ボランティアとかの人が時間交代に入ったりしてお手伝いしたり、本の整理をしたりとか交流を深めたり、あと不登校とか引きこもりになった人もそこまで行けるんだったら、そこで過ごしたりとか、本当に大きな活用というか、生きがいの場所になっているんです。あいたままになっていますので、一番あそこのオープン施設、団体の人の話し合いというか、そう大声でぎゃあぎゃあ言わなければ団体の人たちが打ち合わせをしたりとか、そういう場所に十分使えるようになると思いますので、ぜひとも本当、反対ではなくて、多分セキュリティーとかいろんな問題でそういう答弁になっていたと思うんですが、ぜひとも自分のたちのものは自分たちでつくり上げるみたいな意識はあると思います。ありますので、官と民が一緒になって、そういういい居場所づくりというところをぜひとも考えていただきたいと思います。もう一度答弁お願いいたします。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

そのとおりですよ。私は施設管理の最高責任者という意味からすると、きちんとその施設が、役所というのは個人情報も多分にあります。そういった意味から、それをきちんと使う人が守っていただく、あるいはそれをきちんと管理をすることが守れば私はぜひ使ってほしいなど。例えて言うと、例えば、山内町の旧町長室であるとか、私はその流れて

言うと議場を図書館にしてもいいと思うんですよね。あんな議場で何か本を読むと何かすごく、

〔3番「敵か」〕

何か敵かな気分になりませんか。僕はなるとちょっと思ったんですけど、余り自信がなくなりました。

そういうふうに、例えば、議場に本がずらっと並んでいて、そこで本を子どもたち、障がいをお持ちの子たちが読むとなると、その中から、じゃあ次は議員になりたいと言う人たちも出るかもしれません。だから、そういった意味でいろんな多分波及効果が出ると思いますので、ぜひ空きスペースに本を、図書スペースという言葉よりも本を置いて、それで皆さんで読んで、読み聞かせができるようにはしていきたいなというふうに思っております。

そういった意味で、セキュリティの問題と、もう1つ、どこにどう置くかということを含めて、ちょっと皆さんたちと協議を開始したいというふうに思います。

議長（杉原豊喜君）

3番山口裕子議員

3番（山口裕子君）〔登壇〕

問題点はいろいろありますが、「どようぶんこ」だって、たった土曜日にだけしか使えなかったんですね。普通のときは使ってもいいんですが会議室です。和室の会議室となっていますので、あそこにありますよと言っても、本当に乳幼児の本と古本だけだったんですね、そこから始まっているわけです。そこは畳だから必要です、乳幼児さんが。土曜日だけでも本当にそこを生きがいつくりとして使っているのは、それは本当にこれからも十分に活用できると思います。

今度、新しくその居場所というところは、支所だから土日はあけれんよとか、土日されんやなかねとかいろんな声がありますが、まずいいじゃないですか、月曜日から金曜日まで、9時から5時まででもスタートしてボランティアの方を募ったりして、本当に欲しいとか、本当にいい地域づくりをしていきたいなというところから始まっていいと思うので、ぜひともこれは早急に取りかかっていたきたいというふうに思っております。

以上をもちまして私の一般質問を終わらせていただきます。ありがとうございました。